

社会福祉法人尾道さつき会 尾道福祉専門学校
令和4年度 第2回教育課程編成委員会議事録

1. 日時 令和4年3月13日(月) 14:00~15:00

2. 場所 尾道福祉専門学校 オンライン会議

3. 出席者

広島国際大学 健康科学部 客員教授 久保田トミ子氏

社会福祉法人泰清会 サンライズマリン瀬戸 施設長 久保田あけみ氏

株式会社ゆず 代表取締役 川原奨二氏

校長 邑岡志保 教務主任 金子清美

4. 議題

(1) 学生状況について(邑岡)

- ・入学生状況では、2023年度入学生は新卒21名が確定となった。留学生はなし。委託生は、本日申し込み締め切り。
- ・入学生を市別で見ると、尾道市は微増、三原・福山市は減少している。減少の原因としては、学校の認知度不足(コロナ禍で高校訪問を控えていた)、介護の人気低迷等が考えられる。高校の進路指導担当教員に学校を知らせていく必要がある。
- ・来年度の広報については、校内ガイダンスを中心に取り組み、1対1で高校生と出会える場を多く持ち、本校の魅力を伝えることに重点を置きたい。
- ・留学生について、2023年度インドネシアの方1名を検討していたが、母国の手続きの事情により今年度の入学はなし。現在2年生のベトナム人留学生2名は、成績優秀で卒業を迎え、保証人となっていた社会福祉法人に就職し5年は勤務予定となる。
- ・卒業生数について、2020年度入学生28名→卒業生23名、2021年度入学生36名→卒業生28名。
- ・入学後の休学や退学をどのように低減してくかが重要課題である。心の問題、進路変更等理由は複数あるが、中でも学習しづらさを理由に退学する学生を減らしていく対策として、学びの期間を個に合わせることを可能とし、経済的負担も軽減できるように、新制度として見直し、今年度の在学学生から運用していくことにした。
- ・2022年度卒業生の就職先は、全員福祉関係で決定した。

(2) 2022年度後期教育課程状況(金子)

○2022年度後期授業の実施経過報告

- ・2022年度後期授業では、年明け数日間及び2年生の国家試験前の感染対策としてオンライン授業を実施し、後期全体でのオンライン授業実施率は1割程度だった。

- ・対面授業は、グループワークや実技を含めて従来通り実施できた。
- ・1、2年生の実習報告会をオンライン開催にしたことで、実習指導者も参加していただきやすかったようで、オンライン上でご感想や所見をいただくことができた。
- ・授業展開においては、多機関の方のご協力を得ながら多様な展開ができた。
例えば、1年生について、認知症サポーター養成講座・おのみち見守り訓練を尾道市社会福祉協議会、キャラバンメイト、尾道市地域包括支援センター、尾道市東部地域包括支援センター、尾道市西部地域包括支援センターの職員様方に講師となっただき、具体で実践的な学びの機会とした。また、11月11日介護の日のイベントとして、介護福祉士会の方に介護の本質、介護福祉士の役割について話をさせていただいたり、福祉用具供給協会広島県ブロックの方々から最新のICTや介護ロボットをはじめ、多種多様な福祉用具の体験授業を受けた。
- ・アフターコロナの状況に対応しつつ、今後もZoom等ICT活用場面は必ずあるため、その操作に慣れ、就職後自立してオンライン活用できるよう、あえてオンライン授業は継続していこうと考えている。役立つであろう。

○2023年度行事予定

- ・コロナウィルス5類への変更、マスク着用に係る方針の変更等、国の方針を基に本校における行事予定も決定することになる。
- ・2023年度は、2022年度の行事内容を踏襲して予定しているが、状況を観ながら活動を広げていきたいと教員間では考えている。
- ・コロナ対応においては、2022年度の内容を踏襲する部分と、個人の判断に委ねる部分が共存し、必要な修正の実施し、学生への周知等が必要になってくると思われるが、2022年度とは違った混乱があるのではないかと思われる。
- ・介護実習においては受入事業所の方針に沿っていくことを基本とする。

○2023年度授業課程進行表

- ・介護のコミュニケーションⅠ・Ⅱを新たに北村先生にご担当いただく。北村先生は、岡山市内で事業主として開業、介護事業所教育顧問・研修講師、オンラインセミナー等の実績がある。「夢はでっかく小学生の『将来なりたい職業』ランキングに介護職がベスト10入り、介護職のイメージアップとプロ意識を求めて活動」されている方である。

○2022年度実務者研修

- ・受講者15名。市別では尾道市12名が最多。所属先は障害者関係4名、デイサービス3名、グループホーム3名。

(3) 意見交換他

川原先生) 新年度の非常勤講師となる北村先生の紹介。研修講師やフリーで介護を広め、活動をしている方で、熱くまじめに工夫してくださる先生である。

校長) 多くの非常勤講師に関わってもらいながら学びの多様性を確保すると同時に、教職員にとっても校内環境を整えていく機会に繋げたい。

進級制度の改定について。1年次の終わりに複数の不認定科目があっても、安易に退学・休学を選択しないよう、まずは進級し、2年次に不認定科目を優先的に再履修する選択肢を設けた。全課程を3~4年次の期間で修了できることを最終目的に設定し、個人に合った学習ペースが確保できるようにした。尚、3年次以降に履修する場合は、1科目あたりの学費を設定し、経済的負担の軽減も図る。学生が学校に合わせることを常識とするのではなく、学校の学びを個人に合わせてカスタマイズできるようにしていきたい。

久保田トミ子先生) 国際大では、学生を取りこぼすことなく、入学生より卒業生を増やす取り組みも行った。異なる学部であっても卒業まで持っていこうとした取り組み。学生が学びの履歴で退学にならないようにしていくことは、教育者としての責務ではないかと思う。限られた教育年限に縛られることはない。

新年度開設する実務者研修では、引きこもり支援センターと連携し、引きこもっている方の社会復帰のきっかけとして実務者研修への参加を選択肢に入れていくことになった。人が自由に人生を変えられるように、限られた教育の中、教員の都合に合わせてだけでなく個別的な教育の在り方を進めていく必要がある。休学退学者が減るとよいと願っている。

久保田あけみ先生) 多様性の世の中であり、一遍通りでは通用しない。各研修の中には医療系を目指したが、福祉現場で働いている人がいる。学びや就業する機会を作り、レッテルを貼られることなく世の中で働いていく、その突破口の機会を作っていく必要がある。

何かと何かの掛け合わせでうまくいくことがあり、新たな取り組みに期待したい。社福にも教育の機会の場を設け、県の研修等でも面白味の感じられる内容や経験者に語ってもらう機会があるとよいと感じる。

川原先生) 県内の他介護福祉士養成専門学校の状況について。当校入学予定者のうち、福山市在住者が激減とのことだが、入学生20名を確保できているのは良い状況と思う。

留学生について。N3の留学生でも十分に講義についていける。日本の学生にとっては、外国人の働きから多様性を身近に感じ、良い刺激があるという現状がある。

校長) 引きこもりセンターとの連携については、貴重な参考意見となる。学校も資源の一つになりうる。掛け合わせの発想が問われているが、そこが一番の課題。自分達にはない発想、様々な方と色んな話をする中で、検討材料が増えると感じている。

留学生については、学びの保証のバックボーンを持たせながら受け入れていきたい。

久保田あけみ先生) 当法人の職員に障害者枠として40代の方がいる。脳血管障害をおったが、介護士に復職したいという希望がある。自分達としても、その方を社会復帰に繋げた

いと思う。装具をつけながら、まずは掃除や見守りからとは考えるが、要は、その方の居場所と役割、業務作りが重要である。職場にも社会にも認められる居場所と役割があつてこそ、真の社会復帰と言える。それは個別マネジメントであり、自分たちはそのマネジメントを楽しむことが大切なのだと思う。